

# 愛知の技術・家庭科教育

(第 51 集)

も く じ

- I はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
- II 技術・家庭科教育における教育課程編成の重点
  - 1 技術教育
    - (1) 技術教育における教育課程編成の重点・・・・・・・・ 2
    - (2) 基本的な考えを受けた技術教育の授業実践・・・・・・・・ 2
    - (3) 実践のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
  - 2 家庭科教育
    - (1) 家庭科教育における教育課程編成の重点・・・・・・・・ 4
    - (2) 基本的な考えを受けた家庭科教育の授業実践・・・・・・・・ 5
    - (3) 実践のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
- III 第 7 3 次教育研究愛知県大会の動向と今後の課題
  - 1 技術教育
    - (1) 本年度の動向・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
    - (2) リポート及び討論の内容と指導・助言・・・・・・・・ 9
    - (3) 技術教育としての「ゆたかな学び」を考える（総括討論）・・・・ 10
  - 2 家庭科教育
    - (1) 本年度の動向・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
    - (2) リポート及び討論の内容と指導・助言・・・・・・・・ 10
    - (3) 家庭科教育としての「ゆたかな学び」を考える（総括討論）・・・・ 11
- IV 終わりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

愛知教職員組合連合会 教育課程研究委員会 技術・家庭科部会

2023 年度 教育課程研究委員

ブロック推薦 ◎部長 ○副部長

|    | 名古屋   |     |      | 尾 張    |    |     | 三 河   |    |     |
|----|-------|-----|------|--------|----|-----|-------|----|-----|
|    | 氏名    | 単組  | 分会   | 氏名     | 単組 | 分会  | 氏名    | 単組 | 分会  |
| 技術 | 前田 直希 | 名古屋 | 高針台中 | 榎本 佳祐  | 稲沢 | 平和中 | 佐々木裕直 | 北設 | 東栄中 |
|    | 和田 宏一 | 名古屋 | 矢田中  | 日置滋比古  | 西春 | 新川中 | 後藤 靖智 | 新城 | 新城中 |
| 家庭 | 稲葉 麻里 | 名古屋 | 常安小  | 野村富美子  | 海部 | 宝小  | 武藤 良子 | 岡崎 | 竜南中 |
|    | ○阿部純子 | 名古屋 | 沢上中  | 小出 めぐみ | 愛知 | 高嶺小 | 加藤結香子 | 豊橋 | 二川小 |

第 69 次～第 72 次教育研究全国集会リポート提出者

|    | 第 69 次 |     |      | 第 71 次 |     |     | 第 72 次 |    |      |
|----|--------|-----|------|--------|-----|-----|--------|----|------|
|    | 氏名     | 単組  | 分会   | 氏名     | 単組  | 分会  | 氏名     | 単組 | 分会   |
| 技術 | ◎加藤久海  | 稲沢  | 稲沢中  | ○黒柳優太  | 蒲郡  | 大塚中 | ○所 良彦  | 一宮 | 萩原中  |
| 家庭 | ○富田かすみ | 名古屋 | はとり中 | ◎山田美保子 | 名古屋 | 天白中 | 大澤裕理奈  | 稲沢 | 稲沢北小 |

第 73 次教育研究全国集会 リポート提出者 加藤 仁視 (名古屋・牧の池中)

澤口 茜 (名古屋・日比野中)

## I はじめに

現代社会は、国際化・情報化、価値観の多様化など、数年先も予測できないほど、急激に変化し続けている。こうした社会を生き抜くためには、どんな問題と直面しても、置かれた状況を踏まえ、学んだ知識と技能を応用した解決方法を探究したり、組み合わせ活用したりして、自分で判断し問題を解決する資質・能力を身に付ける必要がある。このような資質・能力の育成は、学習指導要領解説技術・家庭科の目標にも「生活の営みに係る見方・考え方や技術の見方・考え方を働かせ、生活や技術に関する実践的・体験的な活動を通して、よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築にむけて、生活を工夫し創造する資質・能力の育成をめざす。」と示されている。

## II 技術・家庭科教育における教育課程編成の重点

### 1 技術教育

#### (1) 技術教育における教育課程編成の重点

これまでは「物事を正確に考える力」や「物事を正しく覚えられる力」、つまり計算力や記憶力が求められてきた。しかし、GIGAスクール構想によるタブレット端末の導入やテクノロジーの発展により、答えがある問いに対しては、深い思考を必要としない時代となってきた。知識を増やすことが重要ではなくなりつつあり、知識や技能をどのように組み合わせ活用するかやそれらを汎用的に活用する力などが重要になってきており、「わかる」から「できる」への変容を実現していかなければならない。そのためには、知識を学ぶだけでなく、学んだ知識を「使う場所」を作ることが欠かせない。そして、「わかる」から「できる」への変容を促すためには、「失敗」の経験も不可欠である。本実践では、「わかる」から「できる」への変容をめざすことで、子どもたちが学ぶ喜び・わかる楽しさを味わうことができるゆたかな学びの実現を意識した教育課程編成に重点をおくことにした。

#### (2) 基本的な考えを受けた技術教育の授業実践

技術の目標とめざす資質・能力との結び付きを意識した実践

##### ① 技術の目標とめざす資質・能力

<技術の目標>

技術の見方・考え方を働かせ、生活や技術に関する実践的・体験的な活動を通して、よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築にむけて、生活を工夫し創造する資質・能力を次の通り育成することをめざす。

ア 生活と技術についての基礎的な理解（知識の習得だけでなく、さまざまな場面で活用できる概念の理解）をはかるとともに、それらに係わる技能を身に付けるようにする。

イ 生活や社会の中から問題を見いだして課題を設定し、解決策を構想し、実践を評価・改善し、表現するなど、課題を解決する力（学んだことを実際の生活の中で生かすことができる力、どのような問題に直面しても自分なりの判断をして解決することができる力）を養う。

ウ よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築にむけて、生活を工夫し創造しようとする実践的な態度（主体的に意思決定したり行動したりしようとする態度）を養う。

##### ② めざす資質・能力の実現にむけて（生物育成の技術：コマツナ栽培における実践）

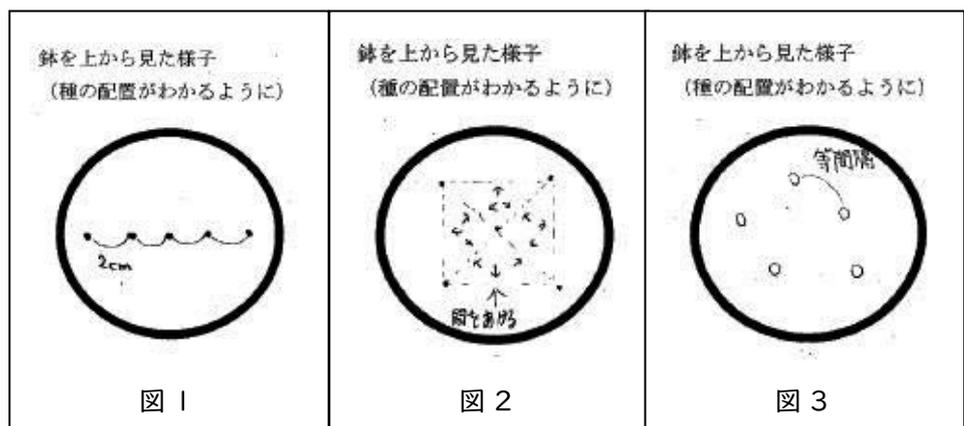
|   |
|---|
| 一次実践  |
| <p>ア 基礎的な理解に係わる例</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 作物の育成に必要な基本的な知識や技能を習得する。</li> </ul> <p>イ 課題を解決する力に係わる例</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 作物を育成する過程で直面するさまざまな問題について、解決方法を考え、実践する。</li> </ul> <p>ウ 生活を工夫し創造しようとする実践的な態度に係わる例</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 一次実践の過程や問題解決の結果を評価し、改善及び修正する方法を考え、気づきや学びを二次実践に生かす。</li> </ul>  |
| 二次実践  |
| <p>ア 基礎的な理解に係わる例</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 一次実践で習得した知識・技能について、より詳しく、より効果的にするための技術について根拠をもって考え、習得する。</li> </ul> <p>イ 課題を解決する力に係わる例</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 一次実践で考えた解決方法や改善方法を実践し、よりよい方法を考えながら実践したり、新たに直面する問題解決にむけて、解決方法を考えたりしながら実践する。</li> </ul> <p>ウ 生活を工夫し創造しようとする実践的な態度に係わる例</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 実践を振り返り、作物の育成過程、問題解決の結果を評価し、改善及び修正する方法を考える。</li> <li>・ 習得した活用できる概念、生活の中で生かす力、自分なりの力で判断し解決する力をよりよい生活の実現のために生かす。</li> </ul> |

### ③ 実践の実際

15cmのコマツナを栽培し、収穫することを目標に、種まきから収穫まで、どのような管理技術が、どのようなタイミングで必要かを調べながら探究的に実習を行わせた。一次実践では、コマツナに適した種のまき方や手順、注意点、そして間引き等、収穫までに必要な管理について、調べながら栽培を行った。その中で、必要な管理技術について調べられていなかったり、知識として習得することはできても、実際に管理を実践することができていなかったりする生徒がほとんどであった。結果として、うまく栽培できなかつたり、収穫適期になっても収穫せず、枯らしてしまつたりする姿が多くみられた。一次実践で失敗を経験することで、そこから得た課題を解決する方法や実践を振り返りながら改善及び修正する態度を生かす場として、二次実践に取り組ませた。

### ④ 一次実践の種まきの様子

コマツナの栽培を始めるにあたり、種、鉢（5号鉢）、培養土等、支給する物品を事前に知らせ、種まきにむけて、必要なことを調べ



させた。調べた内容を、検討し合い、よりよい栽培となるように育成計画を立てさせた。コマツナの種のまき方を書籍やインターネット等で調べると、じかまきや長いプランターを利用した栽培例があげられ、「間引きを行いやすい」という理由ですじまきが紹介されている場合が多い。しかし、実践では円形の5号鉢を使用することや一人5～6粒の種をまくという条件があるため、必ずしもすじまきがよいというわけではない。生徒たちは「間引きが行いやすいように（図1）」「苗の成長が早いものがあったときに葉で陰ができないように（図2）」「鉢の大きさと間引きのバランス、そして根が絡まり合わないように（図3）」など、発芽後の成長の見通しをもちながら調べた内容について意見交流の中で考えを深め、種の配置についてまとめていった。

種まき後、4日ほどで発芽がみられたが、発芽率が低く、2週間経過しても発芽しない生徒もみられた。その原因を探究していく中で、生徒たちは、種の配置についてのみ意識が向いていたが、種を深くにまき過ぎたり、かん水によって種が土の中、深くに流されてしまうことで発芽が阻害されてしまったりした可能性に気付く姿がみられた。発芽していない生徒には、失敗から課題を見だし解決方法を考え、再度、種まきを行った。

⑤ 二次実践にむけて

生徒たちは15cmのコマツナを収穫するために日々の管理を行っていたが、間引きや追肥を行わない生徒も少なくなかった。また、15cmを超えても収穫をする生徒は少なく、そのまま枯らしてしまったり、害虫に葉を食べられてしまう生徒が多かった（図4）。多くの生徒が失敗に終わった一次実践を振り返り、うまくいかなかったことをどのように改善及び修正し、二次実践に生かしていくかをまとめ、二次実践にむけて意欲を高めていた。



図4

(3) 実践のまとめ

本実践では、技術の目標とめざす資質・能力の実現をめざした。一次実践で必要な知識を身に付けるとともに、失敗を経験しながら、なぜ失敗したのか、どう改善及び修正する

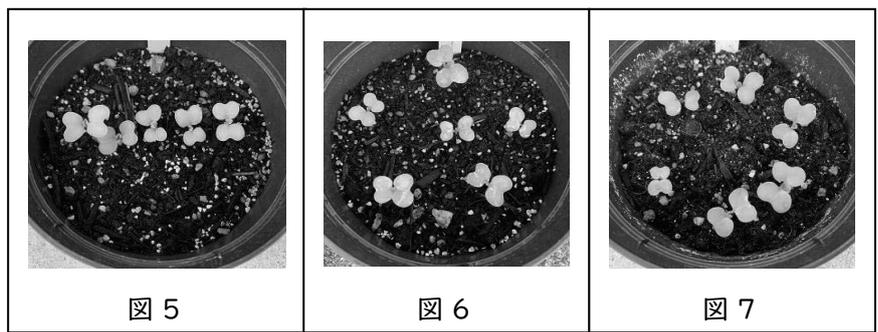


図5

図6

図7

とよいかを二次実践にむけて考えながら取り組んだことで、二次実践では発芽率がほぼ100%になるなど、実践力の高まりを感じた。これらの姿から技術の目標とめざす資質・能力の高まりがみられた。

技術科の目標とめざす資質・能力の実現にむけた過程で、「わかる」から「できる」に変容できるように実践したことで、学ぶ喜び・わかる楽しさを味わうことができるゆたかな学びに近づけたと考える。

## 2 家庭科教育

### (1) 家庭科教育における教育課程編成の重点

私たちの家庭生活を取り巻く情勢は常に変化し続けている。多様な生活のあり方を認められるようになり、共生することが求められている中で、生活者である私たちの価値観が問われているのである。だからこそ、家庭科教育は単なる知識や技能の習得にとどまらず、子ども自身が生活における問題を見いだし、よりよい生活のあり方を多様な立場から検討できるような学びであるべきだと考える。

そのためには、子どもの思いや考えを中心にすえた、問題解決的な学びの展開が欠かせない。主体的かつ体験的な追究活動の中に、対話や問い直しの場を意図的に仕組んでいくことで、子どもが生活を多様な見方でとらえ、価値観を広げられるようにしていく。そして、題材の終末には、自分自身の生活と社会のつながりにも視野を広げ、持続可能な社会のあり方を展望することのできる授業づくりを求めて研究をすすめた。

### (2) 基本的な考えを受けた家庭科教育の授業実践

#### 実践例『つながりの中に生きる（家族・家庭生活）』

##### 〈題材構想にあたって〉

本学級の生徒は、生活にまつわる事象に感心を寄せることができる。家庭用ロボットの普及について考えた際には、機能や価格面を詳しく調べ、自分の生活に必要なかを考える姿があった。しかし、自分とは異なる価値観やライフステージの変化を踏まえた上で、その価値を再検討するまでには至らなかった。今後の生活を切り拓く主体となる生徒には、多様かつ長期的な視点から生活を見つめる経験を積ませたい。そして、どんな状況においても、自分や周囲にとってよりよい生活を求めて動き出す力をもってほしいと願う。

幼児期の食事は、生涯を豊かに生きるための土台づくりに欠かせないものである。しかし、味覚の発達や自我の芽生えにより好き嫌いが激しくなるとも言われる。育児書には味や食感を工夫した調理法が取り上げられているが、丁寧に調理しても思うように食べないことに悩む保護者も多い。個人差が大きく表れる幼児期の食事を取り上げることで、生徒は、多様な価値観にふれることができ、画一的な方法にとらわれず、幼児一人ひとりの個性を尊重したかわり方を考える必要があることに気づくだろう。同時に、生徒自身の将来の生活を展望し、それを支えるコミュニティや公的支援にも思いを巡らせることができると考え、幼児期の偏食への対応から、幼児の成長を支えるためのよりよい環境づくりを見つめる展開を構想した。

##### 〈題材計画〉

| 生徒の意識                 | 学 習 内 容  | 主なてだて   | 時間     |
|-----------------------|--|---|--------|
| ① 幼児の食事はどのようなものなのだろうか | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 幼児食について知る。</li> <li>・ 幼児の偏食に対する対応を検討し、追究すべき問題を見い出す。</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 幼児食を試食する場を設定する。</li> <li>○ 幼児が食事をする様子を収めた動画を提示し、どう対応するかを問う。</li> </ul>   | 1      |
| ② 幼児の食事をどのように支えていくべきか | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分の幼かったころの食生活について保護者にインタビューする。</li> <li>・ 書籍やインターネットで調べたり、関係機関や専門家に取材したりしながら個人追究する。</li> <li>・ 学級で意見交流をする。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 取材やインタビューを推奨する。</li> <li>○ 好き嫌いのとらえ方についての意見を取り上げ、全体に問い返す。</li> <li>○ ゲストティーチャーの話の聞き、考えを再構築する場を設定する。</li> </ul> | 2 + 随時 |
| ③ 今後の子育ての環境はどうあるべきか   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 単元を通して考えたことを整理してまとめ、市内のボランティア団体へ発信する。</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 単元まとめを書き、ボランティア団体の方へ考えを伝えたり、交流したりする場を設定する。</li> </ul>  | 1 + 随時 |

【幼児の食事はどのようなものなのだろうか】

題材の初めには、幼児の食事の例として、じゃがいも、鶏肉、ほうれん草、玉ねぎ、コーンを入れたシチューを提示し、観察したり、試食したりする場を設定した。その際に生徒 A がタブレットにメモしたものが資料 1 である。「サラサラしていて喉を通りやすい」ことや「具材が小さい、柔らかい」「味が薄い」ことなど、幼児の体の成長に合わせて工夫されていることに気付くことができた。また、「野菜の匂いが強い」と野菜の味が幼児にとって食べづらいのではないかと考え始めている様子が伺えた。

幼児の食事はどのようなものだろうか



○観察・試食で感じたことや気づいたこと

- ・ほうれん草のスープにシチューを合体させたような味。
- ・普通のシチューよりサラサラしていて、喉を通りやすい。
- ・具材が小さい。
- ・具材が柔らかい。
- ・野菜の匂いが強い
- ・味が薄い



続いて、幼児の食事の様子を収めた動画を 2 本提示した。一つめの動画は、偏食がひどく、苦手な野菜を避けたり、ほとんどのものを口から出したりしてしまうが、保護者は無理に食べさせることなく、食事を終えた様子が記録されているもの、二つめの動画は、好きなものだけを食べて、苦手なものは食べないが、食事量が少なく心配なので、カレーやパンなどを用意し、食べられるものを食べさせている様子収めた動画である。2 本の動画を視聴した後、幼児の様子と保護者の対応について話し合った。その際の授業記録が資料 2 である。幼児の様子について意見を出していく中で、T27 のように保護者の対応に焦点を絞って注目させた。それに対し S28「無理に食べさせてはいなかった」、S29「食べそうなものを用意して何かは食べさせる」と発言し、周囲の対応によって幼児の食事内容が変わることに気付いていった。S38「どちらも栄養バランスが偏っているからこのままではだめ」

- S24: どちらの子も好き嫌いが激しすぎる。【資料 2】  
 S25: 食べないと生きていけないので、嫌いなものもちゃんと食べさせなきゃいけないと思う。  
 S26: 遊びたくなくて、食べ出すまでが長い。一人では食べられないことがわかった。  
 T27: どちらの子も好き嫌いがはっきりしていたね。それぞれのおうちの人の対応はどうだった？  
 S28: 一つ目は無理に食べさせてはいなかったが、そのせいであの子はお昼ごはんにも何も食べていない。  
 S29: 二つ目は食べそうなものを用意して何かは食べさせるというスタンスだった。  
 (中略)  
 S38: でもどちらも栄養バランスが偏っているから、このままではだめ。  
 T39: みんながこういう場面にどう対応するしたら、どうしたらいいと思う？  
 S40: 僕は嫌な気持ちになってまで食べる必要はないと思うから、無理には食べさせない。  
 S41: 苦痛を与えるのはよくない気もするけど、このまま偏ったままでは不健康だから、どうにかして苦手なものを食べさせると思う。  
 S42: こんなにいやいや言われたら私なら心が折れる。何とか食べられるようにしたい。(生徒 A)

という思いが引き出されたところで、T39 のように問い返した。それに対し生徒 A は S42「こんなにいやいや言われたら私なら心が折れる。何とか食べられるようにしたい」と述べ、自分の立場を明確にして意見を述べた。資料 3 はこの時間を終えての生徒 A の授業日記である。「自分が食べさせるようになったら」、「克服させていきたい」と、幼児の食事へのかわり方を自分事としてとらえ始めている様子が伺える。また、「野菜の形を変えてみたり、トッピングを変えてみたり」

10月2日＊授業日記

【資料 3】

自分が子供に食べさせるようになった時に、イヤイヤ言われたら無になりそうなので、嫌いなものは克服させていきたいと思いました。野菜の形を変えてみたり、トッピングを変えてみたりするのいいかなと思いました。

という記述からは、試食した幼児食を思い浮かべながら、具体的な対応を考え始めていることがわかる。以上のことから、生徒 A は幼児の食事の支え方に対し、問題意識をもつことができたと言える。学級全体としては、無理に食べさせなくてもよいと考える生徒が 4 割ほど、何とかして食べさせなくては行けないと考える生徒が 6 割ほどと意見が割れたことから、「幼児の食事をどのように支えていくべきか」をテーマに追究していくこととした。

## 【幼児の食事をどのように支えていくべきか】

幼児の食事の支え方を追究するにあたり、自分自身が幼かったころの食事の様子を保護者にインタビューしたり、書籍やインターネットを用いて調べたりした。資料4は生徒Aの個人追究のまとめである。母親へのインタビューで聞いたことをもとに、「もちろん食べさせることは大事だけど、一生のトラウマになるくらいなら、別のもので栄養をとってもいいのかな」と、苦手なものは無理に食べさせなくてもよいという思いをもった。その後、学級での意見交流を行った際の授業記録が資料5である。

栄養面や将来の生活習慣を考え、好き嫌いはよくないととらえている意見と、幼児の気持ちや自主性を尊重し、好き嫌いは悪いことではないととらえている意見が出たところで、T20のように論点を絞った。S21は、「好き嫌いは誰にでもあるから前向きに受け止めて」と述べ、好き嫌いのとらえ方によって幼児への対応方法が見えてくると考えた。またS22は「好き嫌いは悪いことではない」と述べたうえで、「自分の子どもだったら体のことがどうしても心配だから、やっぱり食べさせたくなる」と加えた。

「やっぱり」という言葉からも、自分事となると、無理に食べさせなくてもよいと簡単には言えないと、もう一步踏み込んで考えている様子が伺える。これらの姿から、T20の問い直しによって、生徒が好き嫌いに対して、自分とは異なる見方が存在することに気づき、これまでの自分の考えを見つめ始めたと言える。続けて、現在、育児をしている先生の話を受めたビデオレターを提示した(資料6)。お子さんの食事の様子や、食事を与えている際に気を付けていることや考えていること、食事を支える上で大切なことは何かということについての話を収めたものである。資料7はこの時間を終えての生徒Aの授業日記である。実際の悩みや思いを聞いたことで、「好き嫌いに関して問題はとて深刻」と、幼児の食事の大切さや、それを支える大人の思いを実感したことがわかる。また、「子どもによって好き嫌いとその原因は変わってくる」「健康のこと」「大人になったときにどうなるのか」という記述もあり、

### 幼児の食事をどのように支えていくべきか

【資料4】

私は無理して食べさせない派です。母が、私が本当に食べられなかったとき、これから先もずっと嫌なものだと思ってしまうのはよくないと考えて、無理はさせないようにしてくれていました。もちろん食べさせることは大事だけど、一生のトラウマになるくらいなら、別のもので栄養をとってもいいのかなと思います。

【資料5】

- S17: 好き嫌いがある子は体調を崩した割合が多いというデータがある。栄養が偏るから好き嫌いはよくないし、大人になっても嫌いなものは食べないという癖がついてしまう。
- S18: 僕は小さいころ苦手だったものは小学生になって自然と食べられるようになった。だからそんなに気にしなくてもよいと思う。
- S19: その食べ物が食べられなくても、生きていけないわけではないから、好き嫌いを重く考えすぎずに、その食べ物を嫌いな理由を探って支えるのがいいと思う。
- T20: 今、好き嫌いはよくないという見方と、好き嫌いは悪いことじゃないというとらえ方があると思うけれど、どうなんだろう。みんなはどちらだと思う?
- S21: 好き嫌いは誰にでもあるから、前向きに受け止めてどうするかを考えるといいと思う。
- S22: 好き嫌いがあるのは悪いことではないけど、自分の子どもだったら、体のことがどうしても心配だから、やっぱり食べさせたくなると思う。



【資料6】

10月19日\*授業日記

【資料7】

実際に今子育てをしている人の話を聞くと、好き嫌いに関しての問題はとて深刻なんだなあと理解しました。無理に食べさせなくてもいいと思っていたけど、子どもによって好き嫌いとその原因は変わってくるし、健康のことや、大人になったときにどうなるのかという問題もあります。だからその子に合った考え方が必要になってくると思いました。たくさんの視点から見ることで、その子の好き嫌いへの対応方法が見つかることが大切だと思います。

生徒 A が、幼児の食事を支えるためには、幼児の思い、体の成長、将来につながる生活習慣の確立の 3 点から考える必要があるととらえたことが伺える。資料 4 では、幼児の思いにのみ着目した考えであったが、この時間を終えて幼児の食事の支え方に対して複数の視点から考えることができたと言える。そして、「その子に合った考え方」「その子の好き嫌いへの対応方法」とあるように「その子」という言葉を繰り返し使うようになった。これは、生徒 A が幼児一人ひとりには個性があり、それを受け止めたうえでのかかわりが必要だということに思いを馳せたからこそその表現である。以上のことから、生徒の考えから、幼児の好き嫌いに対する見方の違いに気付くことのできる問い返しに加え、それらを価値づけるためのビデオレターを提示し、考えを再構築する場を設定したことで、生徒が生活を多様な見方にとらえ、価値観を広げることができたと考える。

【これからの子育ての環境はどうあるべきか】

【資料 8】

これまでの授業を踏まえ、これから自分が実際に子育てをするとしたときに、心配なことはあるか、と投げかけた（資料 8・T8）。ビデオレターのから、必ず食事のことが話題になることや、好き嫌いや偏食への悩みからうつになってしまう保護者がいることを聞いた生徒は、S9「いい方法が見つからず悩むと思う（生徒 A）」、S10「実際にはそんなに簡単なことじゃない」、S11「友だちや自分の親とかに相談して」と述べた。そこから、これからの子育て環境について考えていくこととした。資料 9 は生徒 A が子育て環境について考えてまとめたものである。身近に「相談することができる人がいる」ということが大切だと述べながら、その他の可能性はないかと子育て支援センターや保健所等で行われる相談活動やボランティア活動についても調べていることから、子育てを支えている社会のしくみに意識をむけ始めた様子が伺える。また、「そういうものに参加して、近い年の子を育てている人と仲良くなるのもいいんじゃないか」と、自ら周囲とのつながりを求めて動き出すことが大切だと考えていることがわかる。その後、これまでの活動を踏まえ、市内でボランティア団体を運営している方を招き、交流を行った。交流を終えての生徒 A の振り返りが資料 10 である。「それぞれの場合にに応じて困ったときに気軽に相談できるいろんな形のしくみが大切」と述べられている。自わから悩みを相談するのに抵抗を感じたり、事情によって助けを求めることができなかつたりする場合があると知ったことで、多様な子育て支援の必要性を感じることがわかる。また、「どんどん増やして利用する人が増えるようになれば、子育てしやすく

T8：これから、みんなが幼児の食事を実際に支えていくことになったら、心配なことはある？  
 S9：その子に合わせて、その子に合う方法を見つけていくことが大切だとわかったけど、良い方法が見つからず悩むと思う（生徒 A）。  
 S10：〇〇先生もビデオで、うつになってしまうお母さんが多くなって言っていた。実際にはそんなに簡単なことじゃない。  
 S11：友だちとか自分の親とかに相談して考えていけばいいんじゃないかと思う。  
 T12：一人で考えていく、というのはとても苦しいし、難しいということだね。じゃあ、これから子育てをしていくときに、安心して育てていくためにはどんな環境をつくとよいかを考えていこうか。

10月24日\*授業日記

【資料 9】

幼児の食事について一人で悩まなくてもいいように、家族や友達など相談することができる人がいるということが大切だと思いました。岡崎市のホームページを見てみたら、知り合いでなくても、子育て支援センターや、げんき館でも相談できるみたいです。子育てサークルも学区ごとにあるので、そういうものに参加して、近い年の子を育てている人と仲良くなるのもいいんじゃないかなと思います。

交流を終えて

【資料 10】

私は、子育てで困ったことを相談するために、子育て支援センターなどに行けばいいと思っていたけれど、通うのが難しい人もたくさんいると分かりました。だから、さんはボランティアの人が直接家に行くという形の支援を始めたそうです。でも、来てほしいと申し込みづらい人もいろいろいるんじゃないかともいっていました。だから、それぞれの場合にに応じて困ったときに気軽に相談できるいろんな形の仕組みが大切なんだと思いました。これから、こういう仕組みがどんどん増やして、利用する人が増えるようになれば、子育てしやすくなると思います。私も悩むことがあったら、気軽に相談していいということを感じておきたいと思いました。 思

なる」という記述からは、地域ぐるみで子育てをしていくこれからの社会の姿を見つめていると言える。そして、「私も悩むことがあったら、気軽に相談していいということ覚えておきたい」と自分自身の将来の生活にも思いを巡らせることができた。以上のことから、生徒 A が自分自身の生活と社会のつながりに視野を広げ、持続可能な社会のあり方を展望することができたと考える。

### (3) 実践のまとめ

本実践では、生徒の思いや考えを中心にすえた問題解決的な学習過程の中に、実体験や外部との交流、考えを揺さぶるための問い直しを意図的に仕組んで授業を展開してきた。そうすることで、生徒が幼児の食事への対応を自分事としてとらえたり、多様な見方の存在に気付いたりし、自分の考えを練り直そうとする姿がみられた。

私たちは誰もがつながりの中に生きている。今回の題材に限らず、生活を見つめ、問題を見だし、大切なことは何かということを生徒と共に突き詰めていけば、その先には必ず地域社会とのつながりが見えてくるはずである。持続可能な社会の構築にむけた授業を行うということを先走りさせるのではなく、生徒が生活と社会とのつながりの必要性や価値を感じた上で社会的な面に目をむけて学んでいくことのできるような題材構想のあり方を模索していきたい。

## Ⅲ 第 7 次教育研究愛知県大会の動向と今後の課題

### 1 技術教育

#### (1) 本年度の動向

「材料と加工の技術」「生物育成の技術」「エネルギー変換の技術」「情報の技術」の 4 つの柱立てで実践の報告や討論が行われた。技術科の目標とめざす資質・能力の実現にむけて、話し合い活動や題材を工夫することで、技術の見方・考え方を働かせる実践など、11 本のレポートが報告された。

総括討論では、「①自ら学び、自ら考える探究型学習を意識した題材や授業展開の工夫」「②双方向性のあるコンテンツのプログラミングによる問題解決例や実践の課題等」について話し合われた。

#### (2) レポート及び討論の内容と指導・助言

##### ①「材料と加工の技術」にかかわる実践について

タブレット端末を活用して、生徒が主体的に調べ学習に取り組んだ実践や自分の意見を他者と交流させようと進んで意見交換がなされた実践が報告された。また、生徒同士による教え合い活動や自作動画で工具の使用方法についてのこつをまとめた実践が報告された。他にも、試作品を作ることで計画段階で失敗に気づき、改善することでミスのない作品づくりができたという実践も報告された。

討論では、自分なりの技術の見方・考え方を引き出す上で、最適化の観点を意識し、多面的・多角的に考えさせていくことや、安全のために工具の使い方を丁寧に指導する過程で、こつに気付かせたり、正しい工具の使い方を定着させたりしていくことの重要性が確認された。

##### ②「生物育成の技術」にかかわる実践について

さまざまな土壌資材の特徴を調べる学習を取り入れ、土の配合バランスを考えた栽培の実践や未知の種子の栽培に取り組ませることで、光の有無や育成場所など環境に合わせた育成方法について追究する実践が報告された。

討論では、生産者と消費者の双方の視点を得ることで、実際に学校での残飯が減るなど生徒の実生活とのつながりを大切にする工夫について意見交換された。

### ③「エネルギー変換の技術」にかかわる実践について

誰もが安心して安全に生活できる未来の社会を実現するために、シニアカーを題材としてギヤ比やタイヤの形状の組み合わせによる変化を考慮したシニアカーの最適化について考える実践が報告された。

討論では、動力を用いた装置の技術を学ぶことは、技術科ならではの分野であり、多くの課題が山積している現代のエネルギー利用について取り扱うことの重要性が話し合われた。

### ④「情報の技術」にかかわる実践について

生活に結びつけやすい学習課題を設定した問題解決学習の実践やチャットアプリの開発、自動車の自動運転支援システムの考察など、P D C Aサイクルを基盤とした問題解決の実践が報告された。

討論では、ブロックプログラミングから言語を用いたプログラミングへの発展が、情報の技術の理解向上につながることを確認された。また、教材の魅力を高め、生徒の学習意欲を引き出すための教材との出会わせ方の工夫について話し合われた。

## (3) 技術教育としての「ゆたかな学び」を考える（総括討論）

「①自ら学び、自ら考える探究型学習を意識した題材や授業展開の工夫」「②双方向性のあるコンテンツのプログラミングによる問題解決例や実践の課題等」について討論を行った。

「①自ら学び、自ら考える探究型学習を意識した題材や授業展開の工夫」については、生徒たちの実生活に即しており、かつ切実感をもてる教材を選択する大切さについて話し合われた。また、自由設計の中に、制約条件を付けることで共通の課題をもたせることができ、仲間との学び合いが促され、かかわり合いが深まったり、主体的な学びにつながったりするという意見が出された。

「②双方向性のあるコンテンツのプログラミングによる問題解決例や実践の課題等」については、HTMLやCSSといった言語でのプログラミング学習が、プログラミング的思考力の向上につながるという意見が出された。

助言者からは、自ら見つけた課題を、解決するまで学習に対する意欲が続くテーマの設定が大切であるという助言を得た。

## 2 家庭科教育

### (1) 本年度の動向

全体として、第72次教育研究大会でも議論された、SDGsと関連させた実践や、ICT機器を活用した実践が多くみられた。また、相互のかかわりの中で考えを伝え合い、振り返りを行うことで自らの生活をよりよくしようと主体的に取り組む姿が報告された。提出された17本のレポートにより、「社会問題と関連させた実践」「興味をひく導入や、題材を工夫した実践」「思考を深める手立てを工夫した実践」の報告と討論が行われた。

総括討論では、①「限られた時間数での授業のすすめ方の工夫」②「持続可能な社会の実現にむけて社会問題についても考えさせるための視点の与え方」③「周りで起きていることを自分事としてとらえ、何ができるか考えたり、行動したりできる授業実践の工夫」について話し合いが行われた。

### (2) レポート及び討論の内容と指導・助言

子どもたちが考えを伝え合ったり、主体的に取り組んだりするための工夫がなされた実践が報告された。

### ①社会問題と関連させた実践

非常持ち出し袋を製作する実践では、実物をイメージした試作を行い、防災意識を高め、製作の必要性を実感させていた。持続可能な社会の形成にかかわる実践では、SDGsをより身近なものにするためにSDGsポイントを意識した朝食づくりや、SDGsの目標を意識した夏の住まい方や衣服の着方・手入れについての課題解決をさせていた。

### ②興味をひく導入や、題材を工夫した実践

衣生活では、導入で教材を活用して玉結び・玉どめを習得するという目的を明確にし、意欲的に授業に取り組みさせていた。食生活では、共通のモデルを設定し、学習内容をもとにモデルに対して改善点を手紙で説明する、将来の自分に手紙を書くなど、振り返りの仕方を工夫することで、よりよい食の選択について考えさせていた。

### ③思考を深める手立てを工夫した実践

消費生活では、責任ある消費者になるという課題に取り組むために、さまざまな思考ツールを効果的に使った実践が報告された。食生活、衣生活では、ポートフォリオ形式で自己評価を行うことで、学びの積み重ねを実感したり、自分の思考の変容を比較・確認したりできるようにした実践が報告された。

助言者からは①授業づくりにおいて目的は先にあるもの、授業は子どもの思考でつなげていくべきである②授業のどこに時間をかけるか、どこまで内容をほり下げるかを見極めることが必要③子どもたち自身が未来をよくするため、コロナ禍を経て見えてきた本当に大切にしたいことを実践できるようにするとよい④「今日の授業で一生覚えておくとよいことがら」を意識して授業をすすめるとよいとの助言をいただいた。また、授業で活用しやすい教材教具や、今日的な課題を扱った授業実践を紹介していただいた。

## (3) 家庭科教育としての「ゆたかな学び」を考える（総括討論）

### ①限られた時間数での授業のすすめ方の工夫

「他教科と関連づける」工夫では、他教科でも関連した内容を扱い、教科横断的に学習に取り組む。「ICTを活用する」では、タブレットを活用して調べ学習を行う、製作手順を動画で示す、学習プリントを紙ではなく校務支援システムで配って回収時間を短縮する、などの工夫が出された。「家庭との連携」を大切にするという工夫では、授業で学習した調理や掃除などの内容を家庭で実践することで、自分事になるという意見が出された。ただし家庭との連携については、地域や家庭の実態に応じて工夫が必要である。

### ②持続可能な社会の実現にむけて社会問題についても考えさせるための視点の与え方

「関連したニュースや新聞記事」を取り上げ、どう思うか問うたり、子どもたちの意見をつないで、社会的な視野でとらえることの価値を見いだしたりするなど、自分の生活と社会とのつながりを考えることができるような教員の投げかけが必要である。「企業の取り組みを紹介する」ことや、その取り組みを生活の中で実践できるように課題を与えるようにする、という意見が出された。

### ③周りで起きていることを自分事としてとらえ、何ができるか考えたり、行動したりできる授業実践の工夫

「実生活を振り返ることで課題を見つけられるようにする」という意見では、導入を工夫し、課題が見つかる、子どもたちが継続して主体的に取り組むことができるようになる。魅力ある導入について考える必要がある。意図的に取り組みを紹介して、調べて深めることで自分事にしていく。「よりよい社会にするために取り組まれている実践例を伝える」、「地域社会の一員として考えさせることが大切」などの意見が交わされた。

#### IV 終わりに

本年度の教育研究大会は、これまで以上に子どもたちが主体となり、一人ひとりのよさや可能性を大切にされた実践が報告され、先生方の日々の努力の積み重ねを感じることができた。

第73次教育研究全国集会では、愛知の代表として、技術教育では名古屋市立牧の池中学校の加藤仁視先生に「身近なものに目をむけることのできる生徒の育成～ものづくり活動における協働的な学び合いを通して～」を提案していただいた。協働的な学び合いを行うことで、見つけた問題に対して探究的に学び、解決するために新たな発想を考え出し、自信をもって取り組むことのできる生徒の育成をめざした実践である。一人ひとりの役割を明確にした班毎の調べ学習を取り入れ、個々が調べた情報を共有し、活用することで、さまざまな土壌資材の特徴や性質を踏まえて、一人ひとりが自信をもってラディッシュの栽培に適した土の配合バランスを練り上げていく実践力の育成をめざしたものである。

家庭科教育では、名古屋市立日比野中学校の澤口茜先生に、「よりよい生活の実現にむけて、生活を工夫し創造する生徒の育成」を提案していただいた。学習方法や目的に合った技能を選択させることで、よりよい生活の実現にむけて、生活を工夫し創造する生徒の育成をめざした実践である。動画教材や、ポイントカードなど、自分に合う学習方法を選択させたり、赤ちゃん甚平のすその始末にあう縫い方を選択させたりすることで、習得した知識を活用し、自分の生活をよりよくしていこうという意欲の高まりをめざしたものである。

今後もより一層充実した生活や技術に関する実践的・体験的な活動を取り入れ、生徒一人ひとりの思いや願いに寄り添いながら、子どもたちの現在、そして未来に生きてはたらく力を育む取り組みに期待したい。そして、子どもたちが願いをもって活動し、試行錯誤を繰り返す中で、その成果を実感できる実践が行われることを願う。

また、技術教育、家庭科教育の教育課程研究委員会においても、これまでの研究を基に教科の専門性を生かし、基礎・基本をおさえながら学ぶ喜び・わかる楽しさを味わうことができるゆたかな学びの実現をめざしていきたい。これからも子どもたちが生活や社会における事象に主体的にかかわり、未来を切り拓く力を身につけることができるように研究をすすめていきたい。

なお、本誌を作成するにあたり、多くの先生方にご協力いただいたことに感謝し、今後、本誌が実践や研究の資料として活用されることを期待する。